

イネもみ枯細菌病（病原菌：*Burkholderia glumae*）

○ 被害と発生生態

苗腐敗症と籾枯症を起こす細菌病である。

苗腐敗症は育苗箱内で数 cm の坪状に発生することが多い。出芽時に感染すると幼芽は湾曲し、淡褐色ないし褐色となり腐敗枯死する。葉齢が進むと葉鞘は褐変腐敗し、芯葉は基部が腐敗し抜けやすくなる。葉の基部が退色して白色になる場合がある。

籾枯症は乳熟期頃から発生し、緑色の穂の中に蒼白色に萎凋した籾が目立つようになる。発病籾の玄米は健全部との境界に明瞭な筋ができ、稔実不良となる。激しく発病すると穂は直立したままになり 70 %以上の減収となる。

苗腐敗症は汚染された種籾を用い、浸漬や催芽、出芽の温度が高すぎた場合（30 °C以上）などに発生しやすい。また、粘土質の透水性の悪い床土や pH5.6 以上の床土で発病が多くなる。

籾枯症は出穂前 7 日間の最低気温が 22 ~ 23 °C 以上で出穂前後に適度の降雨と風があると多発する条件となる。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

- ・無病種子を用いる。
- ・健苗確保のため塩水選（比重うるち 1.13、もち 1.08）を行う。また、罹病籾の除去率を高めるためには、より高濃度（比重うるち 1.14）で実施する。
- ・出芽時の温度が高くなるように注意する。
- ・育苗期間中の過剰灌水は行わない。
- ・苗腐敗症が発生した育苗箱では健全に見える苗も保菌している危険性が高いため、移植しない。
- ・植え付け後、本田初期の水管理は浸冠水しないよう浅水で管理する。

（イ）薬剤防除

- ・種子消毒を徹底する。
- ・播種前および播種時に育苗培土に薬剤処理する。
- ・気象条件から本田での発生が予想される場合には予防的に薬剤（オリゼメート剤、ブラシン剤など）散布する。
- ・オキシリニック酸剤の耐性菌の発生が県内全域で確認（平成 14 年苗腐敗症：92.3 %、籾枯症：69.8 %）されているため、過去に防除効果が劣った場合は他剤に変更する。



苗腐敗症



籾枯症



被害米